

だい か つた けいやく 第4課、237-5000に伝えた契約 - エステル

「エステルはモルデカイに返事を送って言った。「行って、スサにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食してください。三日三晩、食べたり飲んだりしないようにしてください。私も私の侍女たちも、同じように断食します。そのようにしたうえで、法令に背くことですが、私は王のところへ参ります。私は、死ななければならぬのでしたら死にます。」」(エス4:15-16)

エステル記全体のストーリーと内容は、直接聖書を通して見てください。また、時代的な状況や背景が知りたい方は、インターネットを検索して参照してください。

エステル記は、私たちが正典(キリスト教が信仰の規範(canon/κανόν))として定めた神様のみことば)として信じる聖書に含まれています。「神様」という言葉が一度も記録されていませんが、やはり福音(喜びの良い知らせ)の内容が盛り込まれています。あとから、もう一度説明します。

聖書は、堕落、さばき、救い、天国での宴(祝宴)の順番で、恵みというテーマで一貫して解いて説明しています。創世記で堕落した人間が黙示録の新しい天と新しい地に入る過程を漸進的な啓示の形で書いたのが聖書です。創世記からヨシュア記のカナンの地に入るまで、その主題の説明が初步的に一度終わり、士師記でまた堕落し、第二サムエル記のソロモンが神殿を完成することで、もう一度説明されます。列王記でまた堕落を見せ、エズラ、ネヘミヤで神殿を再建し、エステルで祝宴を開く場面でもう一度終わり、ヨブ記、詩篇、箴言、伝道者の書で、その神殿を完成する知恵者であるイエス・キリストを説明しながら、雅歌で神様とその民たちとの天国での愛を描いて、もう一度終わります。

そしてイザヤ、エレミヤ、哀歌、エゼキエル、ダニエル、ホセア書で再び人間の堕落を見せ、ハガイ、ゼカリヤ書で神殿を完成させ、天国の宴を再び見せ、最後にマラキ書で「あなたたちの力ではできないでしょう?」となって旧約聖書が終わります。そして、マタイの福音書が開き、初めてイエス・キリストを登場させ、これまで影で見せてくださった神様の民の救い主の実体を見せてくださるのです。

このすべての過程の中には、神様の計画とそれを成し遂げる神様の熱心だけが含まれています。人間側からの何かの熱心、覚悟、決断によって神様のみこころが変わるのでなく、すでに定められた神様のみこころが成し遂げられることに人々が用いられているのです。

死の危機に瀕しているユダヤ人がエステルの死の決断によって生き残ったのではなく、ユダヤ人(神の民)を生かされることにエステルが死の決断をするようにされたのです。神様のみ働きはひとつの誤差もなく成されます。私たちが神様のみ働きをしないからといって成し遂げられないではありません。エス4:14節で、モルデカイがエステルに「もし、あなたがこのようなときに沈黙を守るなら、別のところから助けと救いがユダヤ人のために起るだろう」と言った言葉がそのような意味なのです。ただ、神様が成し遂げられるそのことに、私が用いら

れるようになるなら、「アーメン」と従順して従うのです。

結局、神の民に敵対していたすべての悪の勢力は滅び、すべてのユダヤ人は2日間の祝宴を楽しむようになります。

エステル記 9章22節

“自分たちの敵からの安息を得た日、悲しみが喜びに、喪が祝いの日に変わった月として、祝宴と喜びの日、互いにごちそうを贈り交わし、貧しい人々に贈り物をする日と定めるためであった。”

これが救いの美しい知らせ、福音です。

イザヤ書 61章1~3節

“神である主の靈がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、心の傷ついた者を癒やすため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年、われらの神の復讐の日を告げ、すべての嘆き悲しむ者を慰めるために。シオンの嘆き悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、嘆きの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに贊美の外套を着けさせるために。彼らは、義の桺の木、栄光を現す、主の植木と呼ばれる。”

237、5000種族（あらゆる国、全世界、地の果て）福音化は神様の計画の中にあります。その中の残りの者（神の民）を神様がみな探して回復させます。モルデカイとエ斯特ルが用いられたように、私と皆さんがそのように用いられることを祈ります。